ですし、又備えなければ社会も、事業主も具合が悪いでしょう。」

収容された女性を花嫁に
―晩年の節子―

昭和39年（1964年）3月、節子は法務省・東京婦人補導院へ異動となりました。この異動は法務省側の強い要請によるもので、後に発行される節子の追悼集にこの時期の活動の記録が残されています。

東京管内の地方検察庁や裁判所、警察に出向いて補導院の処遇の実態を説きました。また、収容されている女性に対し情操教育の一環として、東京石橋美術館所蔵のルノアール、モネなどの名画や、自ら詩作した作品を院内に展示したり、更生の一助にと収容されている女性をモデルに花嫁着付けなどを行ったりしたそうです。

昭和46年（1971年）3月に退職。昭和48年（1973年）には体調を崩し入院。9月10日、辞世の詩「さびたの道」を書き上げ、9月15日に亡くなり多摩墓地に埋葬され、勲四等瑞宝章を授与されています。翌月、東京新聞販売同業組合主催の「新聞のおばさんをしのぶ追悼会」が開かれ、三周忌に有志により高崎節子追悼集「むらさき」が発行されました。

このように、高崎節子やその他多くの人々の女性問題に尽力した活動が、後の「男女雇用機会均等法」や「男女共同参画社会基本法」へと結実していきました。

私と高崎節子

遠賀町文化財保護委員で高崎節子の研究をしている水口一志さんに、お話を伺いました。

水口（みずぐち） 一志（ひとし） さん（芙蓉区）

遠賀町と中間市で文化財保護委員を務める。旧遠賀郡を中心に郷土史を研究し、現在は郷土の偉人再発見に注力している。

――高崎節子を調べるようになった経緯を教えてください。

今から5年前に「ふるさと人物記」（昭31・4夕刊フクニチ新聞社）を見ている時に偶然見つけ、遠賀郡の女性ということが分かり、写真まで載っていて興味がわきました。あの時代に活躍した人がいたんだなと。その後、福岡県立図書館などで調べ続け今に至ります。

――水口さんにとって高崎節子の魅力とは。

遠賀町の偉人であるのはもちろんですが、作品や功績、そして生き方に魅力を感じます。節子さんの追悼集「むらさき」にある節子さんの妹が寄せたエピソードが大好きで、読むたびに胸が熱くなります。自分だったらできるかなと。節子さんの生き方を尊敬しています。

――今後の高崎節子の研究について教えてください。

戦後、「婦人の時間」というラジオ放送にも出演していたようで、節子さん出演回の放送の音源を探しています。節子さんはとても弁が立つ人だったと当時を知る人は言っていますし、ぜひ、節子さんの声を聞き、どんな話し方だったのか知りたいですね。

Episode Setsuko

「天国に宝を積んだとよね」

福岡女子専門学校時代、妹の義子と本屋さんへ行く途中の出来事だった。

西中洲で電車を降りると川の橋のたもとに貧しい親子がうずくまって物乞いをしていた。12月の寒い日だった。

節子は自分のショールをとり、その小さな子供の肩に掛け、財布を逆さまにふると、いくらかの硬貨がアルミの鍋に落ちた。節子は何も言わずに妹・義子の手を引っ張って小走りに去ったという。

このショールは忙しい母が節子のためにやっと編み上げたもので、節子は大喜びしていたものであった。

本代が無いのでツケで買い、電車賃も無く長い道のりを歩いて帰ると、「よかった、よかった。天国に宝を積んだとよね」と母は言ったという。

妹の義子は、母と姉の節子に心の中で最敬礼した。

高崎節子追悼集「むらさき」より

※現在では配慮が必要な表現がありますが、当時の資料から文章を抜粋したものなど一部そのまま掲載しています。